

新たな日中比較語彙論の誕生を促す辞典

森田 六朗

ある日の日本語の授業のことである。文章読解の時間で、「いやいなや」とか「にせよ」などの日本語の文型を教えた後、私は個々の単語の説明に入った。

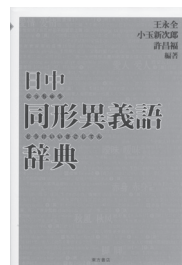
「拘泥」という語を解説していると学生たちがなぜかニヤニヤしている。聞いてみるとこの言葉、中国語でもまったく同じ意味だというのだ。「この言葉は『こうでい』と読みます」といつて先に進んでいいところを、懸命に解説していたわけである。「躊躇」だの「黄疸」だの、日本語として難しそうな語ほど、その実、日中同じ意味であることがまある。教師の悪いくせで、日本語として難しそうな単語を見ると、つい詳しく説明してしまうのだ。

この場合、単に私が事前にきちんと辞

書を調べて確かめておかなかったという、日本語教師としてはいささか恥ずかしい話であるにすぎないが、よく考えてみると、ことはそう簡単な問題ではない。

もう一つ例をあげよう。これは日本語作文の時間でのことである。ある学生が卒業後の自分の人生について次のように書いた。「私は現在大学四年生ですが、未来どうするかについてまだ深く考えていません」。普通の日本人なら、この文章の「未来」は間違いで「将来」でなくてはならないと思うだろう。私も「将来」に訂正したのだが、くだんの学生、どうして「未来」ではいけないか、と聞いてくる。私も一瞬あせった。「なぜって……」。しばらく考え、日本語では「未来」は人類などの相当遠い先のことをいうこ

王永全・小玉新次郎・許昌福編著
日中同形異義語辞典



四六判 368頁
東方書店 [2520円]

とが多く、「将来」は自分の人生など割合近い時間のことをいう、さらに「未来」「将来」ともに名詞であるが、「将来」は副詞としても使え、「未来」は副詞的には使えないと答えたのだが、どうも納得できない風であった。私も何か後味の悪い思いがして調べてみると、中国語では「未来二十四小时内（これから二十四時間の間に）」などと、二十四時間先のことも指すし、また副詞的にも使えるということが分かった。彼がげげんな顔をした理由もそこにあったのである。

よく日本語の教師として、学生の側の言語の特徴を押さえていれば、母語干渉など誤用を分析する際に役にたつ、とい

われる。たしかに、多少でも中国語をかじった教師ならば、文法や発音などいかにも中国人らしい間違いがあるのに気がつくだろう。が、文法や発音どころか、上記のように個々の単語レベルにおいて非常に多くの異同があることが、日本語と中国語の間だけに見られる特色で、英語やフランス語などとの間では考えられない大きな問題なのである。

日本語教師としては、「中国語ではこういう意味だけど、日本語ではこうですから、気をつけましょう」というようなことがさりとて言えればいいのだが、「手紙」「愛人」「大丈夫」など初歩的なものはともかく、そうとう中国語を勉強した人でもすべてについて説明するのは大変なことである。なぜなら、日本語の漢字語一つ一つについて、それが中国にもあるのかどうか、あるならばまったく同じ意味と用法をもつか、ちがうとすればどこがどうちがうかを調べなければならぬからである。

こんど東方書店から出版された『日中

同形異義語辞典』のページをめくっていると、まず私を感じたことは、中国人に日本語を教える教師にとつて、とても便利な本ができた、ということである。いや、誰よりもこの私がまず重宝するであろう。日本語の語感については、まあかなり理解できる方だと言えても、中国語の方はやはり自信がない。ないだけでなく、毎回単語についてすべて辞書を引いている時間もなく、日本語の意味を説明するだけですましているからこそ、先ほどのようなザマになるのである。これは言い訳だが日本語教師は、授業準備にいくら時間をかけてもかけ過ぎることはない、というのが実情で、その分、このような日中比較語彙の詰まった本は貴重なのである。

一方、当然のことながら、中国語を勉強している日本人としても、その意味・用法がこれだけ丁寧に記述され、多くの用例が掲げられているのは、大いに役につく。

ざっと眺めているだけでも、例えば日

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 6月号

人民中国雑誌社 定価 400 円 (税込)
[年間購読料 4800 円 (税込)]

【特集】庶民の財テク・あの手この手「北京五輪いよいよ」増える「青空日数」快適な環境を約束「連載」Beijing's Eyes
①北京五輪はだれのものか◆大メコンに生きる

①聖なる水は天上より来たる◆チャイナ・パワーを読み解く⑥アジアとアフリカの連携強まる◆中国茶文化をぞろぞろ歩き⑨鳳凰単樺を訪ねて◆茶馬古道の旅⑮茶が時を刻む・ラサの暮らし◆映画のセリフで学ぶ中国語⑮王妃の紋章(満城尽帯黄金甲)◆壮大なスケールの「大三国志展」開催◆放談さつくばらん・九州を旅して感じた中日文化交流◆東京通信・北京五輪に寄せる長野の思い

『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治・社会・考古・歴史・美術など幅広い分野の最新情報を掲載。

ご希望の方に見本誌お送りいたします。

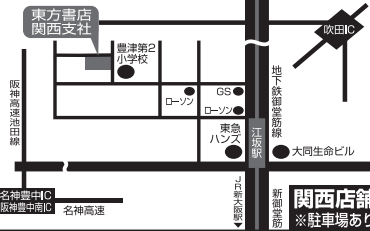
☎ 03 (39397) 0300 東方書店

本語の「心得(こころえ)」「下手(したて)・しもて・へた」「邪魔(じゃま)」など、訓読系・宛て字系の漢字語は明らかに中国語と大きく意味が離れているが、「説法」とか「出頭」など、純粹な漢語系は意味が重なることが多く、古代からの日中それぞれの意味の派生の経緯などが偲ばれておもしろい。こうしたことは異同がまとめて提示されているからこそ、分かってくることである。

日中の同形異義語については、しばしば言及され、強調されることでありながら、今までこのようにまとまった形の類書はあまりなかったように思われるが、それはどうしてなのだろうか？ 初心者にはあまり役にたちそうにないからなのだろうか、あるいは中国語の専門家としては、当然知っていることだからなのだろうか？ 私の思うところ、日中の異同を比較しつつ記述していくことは、実はそうとう大変な、ある意味では勇気のいる仕事だからであろう。

意味分類をする場合、こういう意味が「ある」ことはいえるとしても、こういう意味・用法は「ない」と明言するのは容易なことではない。世の中には自分の知らない用法や意味があり得る。これは中国人についても同じことだろう。さらに微妙な意味の重なり合いをどう判断し、処理していくか。これは相当に「知」と「勇」のある仕事のはずで、日中の学者を集め、日中の辞書をならべて、その異同を書き連ねてすむ、というようなものではない。中国語はあくとして、日本語の語義分類など、すこし疑問を感じる部分もないではないが、著者たちの労を多とすべきであらう。

実をいうと、中国語学習者の一人として、また中国での日本語教師という立場から、私自身、この種の本の必要を感じ、企画を立てたことがある。日中の専門家と出版社で二、三度企画会議ももった。出版社側から、日本語を学習する中国人、中国語を学習する日本人の両方をマーケットに、という営業的にもつと

中国関係専門店 東方書店〔店舗のご案内〕		ご来店をお待ちしております
 東京店舗		 関西店舗 ※駐車場あり
地下鉄神保町駅●半蔵門線・都営三田線、新宿線A7出口より徒歩1分／JR御茶ノ水駅●御茶の水橋口より徒歩10分		地下鉄江坂駅●5号出口より徒歩5分（JR新大阪駅より地下鉄御堂筋線で2駅目）
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3 TEL:03-3294-1001 / FAX:03-3294-1003 営業時間：10時～19時（月～土）/12時～18時（日祭）		〒564-0063 大阪府吹田市江坂町2-6-1 TEL:06-6337-4760 / FAX:06-6337-4762 営業時間：10時～18時/土日祭休

な要求が出て、その線に沿って進めたのだが、話の焦点が定まらない。中国語をメインにした視点と日本語をメインにした視点とで話がごっちゃになり、どうにも前に進まなくなってしまうたのであった。

同形語といっても日本語と中国語である。古代、日本が中国から文字・言葉・概念を借りた時点では、かなり意味が近かったかも知れないが、その後の長い期間、多少の交流はあれ、それぞれ別に育ってきたものを同じ土俵において論議し、日中両方の読者に同時に供するということと自体、話を複雑にするだけだったのである。「コインの裏側」という言葉がある。コインを一方だけでなく、反対側の視点からも見るべし、ということのようだが、日本と中国の漢字語は、決して一つのコインの両側ではなく、一見似てはいるが全く別のコインなのだという、当たり前のことに気がついたのは大分後になってからであった。

以上のような経験があるために、私は、

この『日中同形異義語辞典』が安易に日中両方をマーケットにといった営業的な方向に流れず、日本の中国語学習者を主眼においていることを高く評価したい。編集者および出版社の慧眼といえるであろう。

かつて「同文」という言葉がよく使われた。我々は「日本語と中国語が同じ文字を使っている」という事実、および近隣で文化的な交流が長いことから、うつかり、同根のものと考えてしまう危険に陥りがちである。それくらい日本語の中の漢字語と中国語の単語には形はもちろん、意味の共通したものが多く、それが逆に中国語学習者、日本語学習者の大きな落とし穴となっているのである。本書の目的とするところも、もちろんここにある。

われわれは「同文」という観念と、改めて決別する必要があるのではないだろうか？ そうすることによって初めて、本格的な日中比較語学が成立するような気がしてならない。過去に中国から言葉

を借りた、また近代になって新しいことを貸したというような歴史的文化的な事実は、それとしてきちんと評価をした上で、双方、実は歴史も文化も人の感じ方も、相当に違うということを再認識する必要があると思う。

辞典としては形態も内容も小振りではあるが、この『日中同形異義語辞典』という貴重な書籍の発行を機に、新たな日中比較語彙論がうまれることを期待してやまない。

(もりたろくろう 北京・对外経済貿易大学 日本語教師)

■関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS) 第2回研究会

内藤湖南への新しいアプローチ

文化交渉学の視点から

▼6月28日(土)午前10時より▼関西大学千里山キャンパス以文館4階セミナースペース

【基調講演】内藤湖南の西洋文明観 (陶徳民・関西大学ICIS拠点リーダー) はか

▼参加無料▼申込・関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS (大阪府吹田市手町3-3-35 / coekyoten@inkansai-u.ac.jp / ☎06-6369-0265 / <http://www.icis.kansai-u.ac.jp/>)